

The Great Gatsby の研究——語りの真実性と語り手の倫理

文学部英語英米文化学科 内田 勉

No—Gatsby turned out all right at the end; it is what preyed on Gatsby, what foul dust floated in the wake of his dreams that temporarily closed out my interest in the abortive sorrows and short-winded elations of men.¹⁾

上記は F. スコット・フィッツジェラルド (F. Scott Fitzgerald, 以下、フィッツジェラルド) の小説 *The Great Gatsby* 冒頭部の最後の文章である。要点は、最終的には Jay Gatsby は正しかった、悪いのは Gatsby を食べ物にした奴らである、と言ってよいであろう。語り手 Nick Carraway が自己の体験を小説として (事実の報告ではない) 書く動機・理由を最初に述べているとも読める。何故なら、Gatsby は自分の愛する人 (Daisy Buchanan) を護るために殺されたのに、世間もマスコミも、Gatsby という奴は Myrtle という女性を轢殺して逃げた卑劣漢で、結局、Myrtle の夫 George Wilson に射殺されたと解釈する形で一件落着してしまったからである。Nick はこの作品の最後の章で、Wilson の Gatsby 殺害とその直後の自殺については、「悲嘆のあまり、発狂した」(127) 男の

1) F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby*. Ed. Matthew J. Bruccoli. New York: Cambridge University Press, 1991, p. 6. 以下、同書からの引用は全てこの版により、引用ページナンバーのみ文末括弧内に記す。引用文を日本語で記す時は、全て引用者による訳である。引用に該当する箇所を要約する場合も同様である。

行為とされてしまったと述べている。その直前には、“Most of those reports [the newspaper reports] were a nightmare—grotesque, circumstantial, eager, and untrue” (127) と Nick は書いている。検視陪審 inquest (106, 126) が行われたが、²⁾ Myrtle と Tom Buchanan との不倫関係を知る Myrtle の妹 Catherine が法廷で偽証したため、Wilson が錯誤により Gatsby を妻の不倫相手と見なしたことも明らかにならず、それが故、Wilson の異常に見えた復讐心の本当の理由も明らかにならなかった。Gatsby の車を運転しているのは自分の愛人 Tom であると錯誤していた Myrtle が自分を轢殺する車に向かって走って行った理由も明らかにならなかった。Tom と Daisy と Gatsby。Wilson と Myrtle と Tom。この二つの三角関係が絡まって、Gatsby を除く関係者 4 人全員の虚偽と錯誤の結果として、轢死、殺人、自殺という三件の死が連鎖的に引き起こされたのに、全ての責任 ((Daisy が負うべき Myrtle 轢殺の責任と Myrtle の不倫相手としての Tom が負うべき責任) が Gatsby になすりつけられて、本当に悪い Daisy と Tom は見事に逃げ通すことが出来た。あまりに不条理ではないか。真相は全然違う。だからこそ Nick は真実を語らずにはいられない。Nick が語り始める、或いは執筆する動機をこのように説明することは出来るだろう。

しかし、真実を語るということが如何に困難なものであるか、作者フィッツジェラルドは実によく知っていたと私は思う。Nick が真相を語れば語るほど、Nick は一連の事件への自分自身の関わりを意識せざるを得なくなり、自分の責任の重大さに直面せざるを得なくなる。Gatsby の無実を晴らしたい。Gatsby の愛の真実性を伝えたい。しかしそれは同時に Nick に、自分からはとても語れないような自分の重い罪に向き合わせることになる。ここに Nick の語りのジレンマがある。Nick のこのように引き裂かれた状況が、彼の語るこの作品の理解を難しくしている大きな要

2) inquest は一度しか行われていないが、同じ inquest の内容が二度に分けて書かれている。

因の一つであると私は考える。³⁾

Gatsby を食い物にした悪い奴らの中に、Nick は自分自身を含めていたのかどうか。一連の事故・事件を引き起こした要因の中に、Nick の行為も含まれていることは、比較的明白に描かれている。にも拘らず、Nick はそれらの事故・事件に対し自分にも責任があるとは一度も言っていないのである。Gatsby と Daisy が再会するには Nick の積極的な関与が無ければ有り得なかった。恋人同士だった二人が再会した後も、二人の関係が進展していくことを Nick は是認しており、一度も止めるようなことはしなかった。関係が深まる手助けの様なことすらしている。Tom の不倫には非常に批判的な Nick が、Daisy と Gatsby の不倫には批判めいたことを何一つ言わないのは明らかに矛盾している。しかし、ここで問題にしたいのは、Nick の積極的な関与が無ければ起こらなかった筈の三人の死に対して、とりわけ、Gatsby の無残な犠牲死について、Nick が自分の責任を感じなかったということが有り得るのか、ということである。*The Beautiful and the Damned* における Anthony Patch は精神的崩壊という形で責任を取らされた。*Tender Is the Night* における Dick Diver は妻子も財産も全て失う形で責任を取った。責任倫理というものはフィツジェラルド文学に一貫するテーマである。*The Great Gatsby* の冒頭で、Nick は自分の寛容の精神について敢えて始めに記しながら、しかし、それにも限度があると断った上で (5)、他者批判を続けていくが、自分の責任には気付かず、棚上げするなどということが有り得るのだろうか。もし、そうだとしたら、つまり、Nick の自責の念を作品中に読み取ることが出来ないとしたら、倫理や道德感覚を鋭敏に意識し、それに基づいて他者批

3) *The Great Gatsby* という作品がアメリカの高校や大学では、アメリカの歴史・社会・文化を考える格好の素材となる文学作品としてよく使われていることは承知している。また、そのような側面を強調する研究や批評が多くあることも承知している。しかし、この作品のアメリカ的な問題だけが重要なテーマであるならば、この作品が世界の多くの読者をなぜ魅了し続けることが出来るのか、説明は難しいと思う。言うまでもなく、*The Great Gatsby* が世界文学の一つになり得たのは、この作品の中に、アメリカ的な問題と同時に人間に普遍的な問題が含まれているからである。本論は後者に焦点を当てた。

判をする語り手によるこの作品はナンセンスと言う他ない。もし、この作品を失敗作とか、破綻小説と言うならば、その意味で完全に失敗、破綻していると言うべきであろう。本論は、作品内に明示されてはいないけれども、Nick は自分の重い責任を感じていた、それを様々な箇所で見取ることが可能であることを論証する。

厳しく他者批判をする Nick が、なぜ自己批判をしないのか、なぜ自分の責任を口にしないのか。Nick が気が付かないのではなく、自分の罪の深さ、それが故の自分の責任の重大さを深く意識するが故に、明示的な言葉に出来ないというのが、私の差し当たりの考えである。具体的にテキストに沿って論じていこう。Daisy との再会の場を Gatsby の邸宅の隣に住む Nick の家にするというのは Gatsby のプランであった。このプランの実現に手を貸すように、Nick は Jordan Baker とのデートの時に、Jordan から要請される。Nick は Jordan とは、Buchanan 夫妻の豪邸にディナーのゲストとして招かれた時に初めて出会った。未婚の二人を引き合わせるため、Daisy が仕組んだお見合いのようである (18)。Nick は Jordan が新聞のスポーツ欄にその写真がしばしば出るような有名な女子プロゴルファーであることを知る。しかも、Buchanan 夫妻のような上流階級の一員である。(少なくとも、その周辺に属する女性であると Nick は思っていた。) Nick にとっては、憧れの女性と言ってよい。その Jordan と交際を始め、彼女の性格上の欠点を見抜きながらも、強く惹かれていく。そういう女性から直接要請されて、断るという選択は、Jordan を諦めるという覚悟を伴うだろう。その要請を受け入れることが道徳的に正しくないということは、Nick には勿論分かっていた筈である。しかも、このデートの直前、Gatsby とランチを共にした時、同席した人物 Meyer Wolfshiem が 1919 年の悪名高きワールドシリーズの八百長試合を仕組んだ黒幕であることを Nick は Gatsby 自身から聞かされていたのである⁴⁾。そんな怪しい人物と関係を持っている Gatsby を Daisy に引き合わせる場として、Nick が自分の家を提供するなど、有り得ないでは

ないか。Nick が Jordan と知り合えたのも、元々は Daisy が Nick をディナーに招いて彼女を紹介してくれたことがきっかけだ。そのディナーの席で、Daisy に対する Nick の憧憬が減ずることはあったとしても、Daisy を害することを快とする理由は Nick には全くない。Jordan の要請を受け入れることは、Daisy を予測不可能な恐ろしい運命の中に突き落とすことになりかねない。そういうことが全く想像出来ないほど愚かな人物であると Nick を見なすことは難しい。読者から見れば、Nick の行為は悪と断ずるしかない。しかしこの時、Nick の Jordan に対する思いがかかっていた。悪と恋愛。この二つに引き裂かれた時、人間にはどういう選択が出来るのか。Nick は、事の良し悪しを考えることを避けた。この時の場面、「いつの間にか暗くなっていた (It was dark now)」(63)。夏の夜の闇に包まれたことを示す文章だが、私には、Nick の心の状態をも暗示した表現に思われる。そのほぼ直後に現れる表現が“Suddenly I wasn't thinking of Daisy and Gatsby any more but of this clean, hard, limited person” (63)。Daisy や Gatsby のことは突然考えなくなり、Nick は Jordan のことだけを考えてのである。この場面は、第4章の終わり近くだが、victoria という二人乗り用の馬車に乗ってセントラルパーク内を回っている Nick は Jordan を強く抱きしめ、(恐らくこの時

4) Gatsby は Nick と初めてランチを共にするこの日の午後、Jordan から Gatsby の要請を Nick に伝えるように手配していた。だからこそ、この日、ニューヨークに向かう車の中で Gatsby は、自分は信用に値する人間であることを Nick に示す工作をした。その工作は Gatsby が思っていたほど成功したわけではない。(そう言える理由について本論では議論しない。) いずれにせよ、この大事な日に、Wolfshiem のような怪しい人物をランチに同席させたことは、Gatsby の構想と矛盾していて不自然である。フィッツジェラルドの作品を全て読んで読者として、彼の作品には一方で、巧妙なプロットが作られているが、他方ではそのプロットの中に不自然な所や矛盾した個所がまま生ずることに気付いている。しかし、フィッツジェラルド作品における矛盾問題を考える時、作者の不注意と結論することには私は非常に慎重な立場を取る。なぜならば、一見、矛盾・不自然と思えるような所が、実は後になって、見事な合理性を持っていることに気付かされたという経験を私は何度もしてきたからである。この場面について言えば、Nick が自分の家で Gatsby と Daisy が再会できるよう御膳立する了承を Jordan に対してすることが、Nick にとって、如何に彼の道徳観念に反していたか、その大きさを強調する意味があったと理解して、初めて私にはこの矛盾が意味を持つ。

初めて) 口付けをした (63) という表現でこの章は終わる。口付けが要請了承のしるしである。愛情表現以外の意味を持っていたのである。取引だった。Nick と Jordan の関係が深まる時、悪の誘惑が介在していた。よくないことをしたという意識は確実に Nick にあった筈である。だからこそ、この時の Jordan の微笑みを描く時、“Her wan scornful mouth smiled” (63) という表現を Nick は選んだのである。「他者を軽蔑する」のは Jordan の特徴の一つで、何回か既に使われた表現だが、その時の言葉は contemptuous であった (12, 18, 35)。scornful という言葉が Jordan に関して使われるのは、この時が初めてであり、テキスト全体としてもこの時だけである。(Jordan とは関係のない箇所でも scornful はもう一度だけ使われる。) ⁵⁾ Jordan の属性としての contemptuous ではなく、敢えて、scornful という異なる表現を選んだのには理由があるだろう。Jordan はこの時軽蔑の笑いを浮かべていたと Nick は確実に意識しながら、了承したのである。この場面が続く第 5 章の冒頭は次の文章で始まる。「その夜、ウェストエッグに戻って来た時、一瞬、自分の家が火事だと思った (When I came home to West Egg that night I was afraid for a moment that my house was on fire)」(64)。実際には、隣の Gatsby 邸全体が灯りで煌々と輝いていたわけだが、Jordan とのデートから戻ったばかりの Nick が、真っ先に自分の家が燃えていると直感したことに Nick の罪の意識が関係しているという読み方は、間違っているだろうか。

この第 5 章で Gatsby と Daisy は Nick の家で 5 年ぶりの再会をするが、この場面は第 2 章における Myrtle のアパートで、Tom と Myrtle の不倫の現場に Nick が否応なく留まらされた場面を想起させる。第 2 章では、Nick は彼らの寝室の前で、息を潜めているしかなかったのであるが (26)、

5) デジタルテキストを利用できるようになって以来、この種の検索は非常に容易になった。それまでは *The Concordance of The Great Gatsby* が使われていたが、使い勝手はデジタルテキストの方が断然優れている。このような技術の進歩は、文学研究のあり方にも影響を与えると私は感じている。

第5章では、逆に、Gatsby と Daisy が二人だけである静まり返った自分の家の居間に入る前に、Nick は自分が戻ったことを二人に気付かせるため、あらゆる物音を立てる (70)。これら二つの場面の対比は滑稽味のある描き方がされているが、それだけではないと思う。Tom と Myrtle の不倫には不道德と醜悪さしか感じない Nick だが、人妻 Daisy と彼女の嘗ての恋人 Gatsby とを自分の家で引き合わせている自分のしていることは何なのか。しかも、Nick は Jordan との関係を深めるための謂わば取引材料として、Jordan からの要請を受け入れたのである。それを Nick が全く意識していないとしたら、Gatsby と Daisy の再会場面が、Tom と Myrtle の不倫の場面を想起させる書き方にはならなかったと思う。Nick は二人を居間に残して独り裏庭に出た時、Gatsby の邸宅を見上げる自分自身を教会の尖塔を見つめながら思索にふけるカントになぞらえた (69)。The Great Gatsby の読者を困惑させる箇所である。フィッツジェラルドがこの作品をフランスで書いていた 1924 年は丁度カント生誕 200 年に当たり、パリではカントに関わる催しが多く開かれおり、新聞でも報道されていた。フィッツジェラルドはこれらを目撃していたのではないかと類推し、それでカントがここに出て来ると主張する論考もある。⁶⁾ 私はそのような可能性を一概に否定しないが、もっと内面的な関連を重視する。カントの言説の中で最も一般に知られているものの一つに、“every man is to be regarded as an end in himself and not as a means to something else” という命題がある。⁷⁾ Gatsby も Jordan も Nick を手段として使っている。Nick も Gatsby と Daisy を手段として使っている。Tom が Myrtle を快楽のための手段として使っていることは言うまでもない。この作品の中で描かれてきた人間関係は殆ど、自分の利益のために他人を手

6) Horst Kruse, “The Great Gatsby: A View from Kant’s Window,” *The F. Scott Fitzgerald Review*, Vol. 2, 2003, pp. 72-84.

7) Bertrand Russell, *History of Western Philosophy*, 1971 (Sixth Impression), 678. 引用文の後半の一部は引用者が調整したが、文意は Russell の原文と同一である。

段として使う関係ばかりである。それに対する Nick などの異和感、特にこの場面では、Nick 自身が他者を自分の欲望達成のための手段として使ったという意識が、皮肉としてか自己批判としてかは判然としないが、カントが出て来る理由と結びついていると私は思う。Nick が自らをカントになぞらえて内省していたおよそ 30 分後に、雨が上がり太陽が出た。Gatsby のメイドが邸宅の窓を開け放ち始め、ついでに庭に唾を吐いた。この時の表現 “spat meditatively into the garden” (70) が私には奇妙に思われる。“meditatively” は思索するカントには結びつくが、メイドの唾の吐き方の副詞としては意味をなさない。みずからをカントになぞらえた Nick が我に返る、現実に戻る契機になったということだろうか。上記引用に続く文章は、「私は家に戻ることにした (It was time I went back)」(70) である。

第 5 章の再会場面で、Nick が humiliation (恥辱) を感じた時が一回だけある。⁸⁾ 化粧直しに Daisy がバスルームに行ったので、タオルを新しいものに替えるのを忘れていたことに Nick が気付いた時である (70)。Daisy を自宅に迎える前に、周到に用意していた Nick にしてみれば、ぬかったと思うのは自然ではあるが、私はどうしてもここで、第 2 章における Myrtle のアパートで、ゲストの一人であった Mr. McKee の顔に付いていた髭剃り用の石鹼の泡をずっと気にしていた Nick のことを想起してしまう。Nick が気に懸けるべきことに著しい不均衡があると思う。不倫という行為は 1920 年代のアメリカ社会において許されざるべきものであった。Tom の知人たちが、「情婦と一緒に彼がレストランに現れることに怒った」(21) というのはそのことを意味している。法的にも処罰の対象になった。⁹⁾ Myrtle の夫 Wilson に不倫関係を察知されたいらしいと感じ

8) 第 5 章では、この前に、Gatsby が “I’m sorry about the clock” という有名な台詞を言った直後に Nick が自分の表情について “My own face had now assumed a deep tropical burn” (68) と述べている。顔が焼けるほど火照っていたという意味にとれるが、Nick の羞恥心の現れと読むことは可能だろうと思う。しかし、この文脈で、どういう意味での羞恥心なのか、今の私には明確に説明できない。

た Tom が即座に Myrtle を厄介払いしようとしたのは、それを考えたからだろう。その時の Tom が Wilson に車を明日売ると急に言い出した (97) のはそれが理由であろう。¹⁰⁾ Nick はとりわけ、不倫に対して厳しい感覚を持っていた。だからこそ、第 1 章における Buchanan 家のディナーの席で、Myrtle から Tom に二度目の電話があった時、「即座に警察に電話するべきだ」(16) と、厳しい感想を持ったのである。また、Jordan に次第に惹かれていくのを自覚した時には、故郷に残してきた女性との関係をまずきちんとすべきだと考えたのである (48)。

そうであるならば、なぜ Nick は Myrtle のアパートに行ったのか。それだけではなく、なぜ、そのアパートでのパーティーに Nick はほぼ最後まで居残ったのか。Nick 自身も言っているように、彼は途中で出たかった (30)。Nick が Myrtle のアパートから去るべき最も自然な機会は、まだパーティーが始まる前、タバコが切れたので、Nick がドラッグストアに買いに行った時である。なぜ、ゲストである Nick がタバコを買いに行かなければならなかったのだろう。テキストには書いてない。Nick が自分で買いに行くと言ったのかもかもしれない。このあと分かることだが、ホストである Tom はサンドイッチを買って来てもらうために管理人に電話している (30)。Nick が自発的にタバコを買いに行くと言ったとしても、その時に Tom が管理人に頼もうと言う方が自然だ。Tom と Myrtle はこの時、Nick を厄介払いしたかったのだ。Nick が戻って来ると、案の定と言

9) 2016 年、Rutgers 大学 Alexander 図書館で 1920 年代の *The New York Times* を読むことが出来た。不倫を原因とする訴訟の報道は（不倫で逮捕された事件も含め）時々あった。Philip E. Lampe, ed., *Adultery in the United States*, pp. 70-72 における記述によると、1930 年代前半までは合衆国全体で姦通罪が存在していたようだ。同書 (p. 70) によると、1980 年代においても、いくつかの州で姦通を刑法上の犯罪 (adultery statutes) として規定している。

10) 妻と Gatsby との関係を初めて知った Tom が、その二人に車で先に行かれた時、二人に追いつくために Tom はアクセルを強く踏む込むが、その時の表現 “Instinct made him step on the accelerator with the double purpose of overtaking Daisy and leaving Wilson behind” (97) において、なぜ Wilson を背後に退ける目的が Tom に生ずるのか、法的問題を前提にして初めて意味を持つはずである。

うべきか、Tom と Myrtle の二人は寝室にいて、姿を現さない。Nick は自分が居間にいる気配を感じさせないように静かにしているが、時間つぶしに読んでいる本 *Simon Called Peter* は全く頭に入らない。Nick は自分があまりにも軽んじられていると考えるのが当然だ。こんなに遠慮してまで、この場に留まる必要はない。この時点で、黙って帰るというほうが自然だ。まさか、Myrtle の妹 Catherine の顔を見たいが故に Nick は残っていたと主張する読者は多くはないだろう。奇妙なことは、Nick がこのエピソードの前に自分の泥酔に言及することだ。「私は生涯で酒に酔ったことは二度しかない。二度目が、この日の午後だった」(25)。この時読んでいた *Simon Called Peter* を全く理解できなかった理由も、Nick はウィスキーのせいだったかもしれないと言っている(25)。この日の Nick の振る舞い全ての不自然さを酒のせいにして、それ以上の反省・考察を避けているかのように私には思える。

Nick の家で Daisy との再会を果たした Gatsby は、彼女と Nick を伴い隣の自邸に入る。この時、Nick は読者には奇妙に思える体験を連続して二度する。一度目は、Gatsby の邸内を歩き回っている時、全てのカウチやテーブルの背後に Gatsby のゲストたちが隠れ潜んでいるのではないかという Nick の幻覚体験である(71)。二度目は、Gatsby が邸内の図書室 the Merton College Library のドアを閉めた時、フクロウ男 (the owl-eyed man) の笑い声を確かに聞いたという Nick の幻聴体験である(71)。前者には Nick の後ろめたい気持ちがかかっていると読むことは可能であろうと思うし、後者は、Gatsby のプランが彼の意図通りに成功して得意の絶頂にいる時、彼の夢の破綻を予言する笑いとも取れるが、Gatsby と Daisy の不倫につながる手助けをした Nick の行為を笑っていると読むことも可能であると思う。¹¹⁾ Nick の心の奥底に良心の咎めがあ

11) Gatsby の夢の破綻や彼の死を暗示する事象が予示的に何度も出て来るのはこの作品の特徴である。そのこととは別に、Nick がフクロウ男と予示能力を関連させるのは、Gatsby の埋葬の場にフクロウ男が突然姿を現した後の、Nick の hindsight の可能性もある。但し、

るのか、彼の潜在意識から生ずるのか、いずれにせよ、Nick が自分の倫理的背信行為に全く無自覚であったとは、テキストに書かれている部分だけで考えても、有り得ないと思うのである。

第6章で Daisy が Tom と共に初めて Gatsby のパーティーに来た時、隣の Nick の家の前で、30分ほど彼女は Gatsby と二人だけの密会を楽しむ。この時、Nick は二人が邪魔されないように、見張り役まで務めるのである (86)。刊行本では比較的あっさりとして書いてあるが、作品原稿では、Nick の役割がもっと具体的に書いてある。密会を望む Daisy に対し、Nick は「自宅の鍵を渡そうか (Do you want the key?)」とまで言っているのである。¹²⁾ Gatsby と Daisy の関係の進展に、自分が更に手を貸すという意味について、Nick は何を考えていたのだろうか。なぜ、だれが見ても、将来大きなトラブルになるとしか思えないことを進めることに Nick は積極的に関与し続けたのだろうか。Nick の倫理問題を考える時、これが私には一番むずかしい。このパーティーの後、“You can't repeat the past” (86) と、ニックは初めて Gatsby の夢の非現実性を指摘して警告する。有名な台詞だが、この台詞の中に Gatsby の夢が破綻する本質的理由があるとは私は思わない。むしろ、この台詞には、Gatsby の夢の実現にニック自身がこれまで深く関与してきたことに対する Nick の自己批判の意識が全く感じられないことの方に大きな問題を感じる。腐りきった Tom と離婚して、Daisy は Gatsby と再婚すればよいと Nick は思っていたのだろうか。しかし、それは有り得ない解釈だろう。なぜなら、Tom に女がいることを Nick は初めて知らされた時、それが故に Tom の家を出る気など、Daisy には全くないと Nick は断定していたからである (19)。

第3章、Nick が初めて Gatsby のパーティーに行った時、フクロウ男は Gatsby の図書室で、“if one brick was removed the whole library was liable to collapse” (38) と不気味なことを呟いていた。

12) *The Great Gatsby: A Facsimile of the Manuscript*, 151. Daisy の不倫に積極的に関わる Nick の役割はゲラ校正の段階で薄められる。その理由については本論では議論しない。

この小説の山場である第7章において、Gatsby の夢は二つの段階を経て、決定的に破綻する。一つ目は、よく知られたことだが、プラザホテルにおける Tom と Gatsby の対決場面で、Gatsby の金の出所の怪しさが Daisy にも察知され、彼女が Gatsby から身を引き始めた時である (105)。二つ目の決定的な要因は、あまり言及されないが、Myrtle の轢死事故である。Daisy がこの事故を引き起こして轢き逃げしたことにより、Daisy と結婚するという Gatsby の夢は決定的に瓦解した。白い宮殿に住む王女のように例えられた理想の女性 “High in a white palace the king’s daughter, the golden girl” (94) が、一瞬にして、轢き逃げ殺人犯に転落したのである。しかし、それは一般社会における倫理的な意味で (或いは法的な意味で) Daisy は転落したのであって、Gatsby にとっては Daisy の価値は全く変わらない。彼女を護るために、自分が身代わりになると Gatsby は言う (112)。愛の真実性は、こういう形でしか証し得ないものだが、Gatsby が Daisy を護ることは出来たとしても、Daisy と結婚出来ないことは明らかである。Gatsby の夢の非現実性と彼の蓄財手段の反社会性を指摘する評論はいくつもあったが、彼の夢が、Daisy の引き起こした轢殺事故によって最も決定的に不可能になったという点は強調しておきたい。

轢殺事故は Nick の語りの操作によっては起こすことが出来ない。実際の作者フィッツジェラルドの操作によってのみ起きる。どのようにして起きたか。テキストを詳細に読むと、事故が起きるまでの過程で、Nick の関与なしに事故は起こり得ない展開になっていることが分かる。Buchanan 夫妻の邸宅から Daisy たち5人がニューヨークに向かう時、始めに車の交換が行われなければ事故は起きなかった。“Shall we all go in my car?” (94) と Gatsby が提案すると、Tom が Gatsby の車を運転させてくれと申し出る。Gatsby はガソリン不足を理由に渋るが、もし本当にガソリン不足であるならば、そもそも Gatsby が初めに皆一緒に彼の車で行こうと提案したことと整合しない。この日、Gatsby は Tom と対

決して決着を付けるという自分の人生で最も重大な日であることは分かっていた。そういう日には、誰もこれ以上出来ないというだけの用意をするもので、ガソリン不足が事実であったとは考えられない。Gatsby は Tom の申し出を断る言い訳として使った筈である。結局、Gatsby の車に Tom, Jordan, Nick の三人が乗り、Tom の車に Gatsby と Daisy が乗り、二台の車でニューヨークに向かった。途中で、Nick がガソリンのことを問題にする。「私はガソリンについて Gatsby が口にしたことを思い出した (I remembered Gatsby's caution about gasoline)」(95)。Nick がなぜ、Gatsby の口実としてのガソリン不足を真に受けたかは不思議だ。既にゲージを見ていた Tom は (94)、ガソリンは十分あると反論するものの、Jordan にも促されて、Wilson のガソリンスタンドで給油のため車を停める。これまで、自分の主張を押し通してきた Tom がここで突然、彼から見れば劣位者である Nick や Jordan の言うことを聞いたのも奇妙だが、ここで Gatsby の車が停まらないと、帰りの事故は起きないのである。そして、車を停めるきっかけを与えたのは明らかに Nick である。停車した Gatsby の黄色い車をガソリンスタンドの二階に監禁されていた「Myrtle が凝視して (peering down at the car)」(97)、彼女の脳裏に黄色い車と愛人 Tom が結び付く形で強烈に焼き付けられた。しかも、彼女の不倫を察知した夫 Wilson によって、Myrtle は今にも Tom から引き離され、西部に連れて行かれるという状況だったのである。第7章の始めの方で、この日は「焼け付くように暑い (broiling)」(89) 日だったと、暑さが特に強調されている。この場面でも、「容赦なく降り注ぐ熱波」によって、「私は混乱し始めていた」(96) と書かれている。Nick は何を混乱したのか。誰が guilty かの同定をめぐって混乱したのは明らかである。“unforgivably guilty” (97) という形容に最も相当する人物は、この時点のこの場面では Tom であろう。それを Nick は、全くの被害者である Wilson に当てはめているのである。この場面で guilty が当てはまらないのは実は Wilson 一人しかいない。Nick も Jordan も Myrtle も guilty

である。この時、Nick は自分が倒錯していたことは認識しているが、unforgivably guilty と呼ぶべき人物として自分を含めていたのかどうか。彼がそう考えたとしても不思議はないが、テキストにそれを窺わせるふしはない。しかし、この時より前、7章の始めのあたり、Daisy に招待された Gatsby が Nick と共に、初めて Buchanan 邸に入る時、Nick は再び、奇妙な幻聴体験をしていた。丁度この時、のちに Gatsby を殺害する Wilson から Tom に電話がかかってくるが、それに対する Tom の執事の返答が、「主人の死体 (The master's body!)」(89) と Nick にのみ聞こえたのである。まるで、8章の終わりで、Gatsby の召使たち (その内の一人は執事) と Nick が、プールに浮かんでいる Gatsby の死体を発見した時に、Gatsby の執事が叫んだとしてもおかしくない表現ではないか。実は、Nick が、Gatsby と共に Buchanan 邸に行くことを了承していなければ、Gatsby が一人だけで行くという事態は有り得なかった。Myrtle の轢死事故に結果するこの日の Buchanan 家でのランチが実現することにも Nick は不可欠の存在として深い関わりを持っていたのである。実は、Myrtle の轢死事故こそ、Nick の認識を変える決定的な転機だった。それは、Nick が Jordan との関係をホテルプラザで Gatsby の夢が実質的に破綻した後も全く変えていないにも拘らず、轢死事故に遭遇した後になって初めて、Jordan は自分の側ではなく、Tom たちの側にいる人間で、自分にはついていけないと理解する (111) ことにも現れている。

ホテルプラザのスイートルームを借りることになる経緯を述べる所で Nick は奇妙なことを書いている。その部屋に落ち着くに至る長い議論は何一つ覚えていないが、「肉体的な鮮明な記憶が一つ残っている。私の下着が濡れた蛇のように両足にまとわりついていた」(98)。Nick は語り全体の中で、自分の宗教的立場に関しては何一つ示さなかったが、“a son of God” (77), “the incarnation” (87) などの語彙を使っていることから明らかなように、キリスト教の用語に親しんでいた。蛇は当然、キリスト教的な意味を帯びている筈で、罪・誘惑・墮落等の意識だけが、この時の

Nick の記憶として残っていたということを暗示している筈だ。轢殺・射殺・自殺という一連の事件の後、二年を経てからこの日のことを振り返った時に、Nick が、ホテルプラザのスイートルームに至る過程で、唯一記憶していることが自分の肉体にまわりつく蛇、罪のシンボルと結びついていたことは留意されるべきである。

ホテルプラザのスイートルームにおいて、Gatsby の金の怪しさに疑惑を抱いたのは Daisy だけではない。Nick も同様である。Nick が Gatsby の金の出所に疑惑を持つのはもっと早い段階だったが、その疑惑が決定的になるのはこの時だった。そして、Myrtle の轢死事故。Nick には散々だった。耐え切れなかった。Tom の車で Nick と Jordan が Tom の家に来た後には、Nick はもう、その中に入る事が出来なかった。Jordan に腕を取られて誘われても、その中に入る事は出来なかった。“I’d be damned if I’d go in; I’d had enough of all of them for one day and suddenly that included Jordan too” (111)。この文で、that は all of them を指し、この時点で轢き逃げしたのは Gatsby と思っている Nick にとって、Gatsby のほかに Tom と Daisy が含まれている。しかし、敢えてなぜ、Jordan も加えたのだろうか。この時の Nick にとって最も悲痛で耐え難かったのは、Myrtle という一人の女性が轢き殺され、彼女の無残な死体を目撃し、しかも、轢き逃げしたのが Gatsby であるという衝撃的な事実であったろう。全てがぶち壊しである。遂に、死者が出、Gatsby は轢き逃げ犯になった。Nick の最大の怒りと侮蔑はこの時、恐らく Gatsby に向けられていただろう。だからこそ、この直後に、Buchanan 邸の庭に潜んでいた Gatsby を目撃した時、「こいつは強盗でもする気か (For all I knew he was going to rob the house in a moment)」(112) と Nick は思ったのであり、「Gatsby が背後に Wolfshiem の一味を引き連れていたとしても驚かない (I wouldn’t have been surprised to see sinister faces, the faces of Wolfshiem’s people)」(112) と、Gatsby に対する最大級の侮蔑の言葉を読者に投げつけている

のである。この時点では Nick はまだ、Myrtle が Gatsby の車に向かって飛び出して行った事実は知らない。しかし、轢死事故は Gatsby 一人の過失だけで起きたのではないことを Nick は強く意識していた。Gatsby の車で彼と一緒に帰れと Daisy に命じたのは Tom である。この日、Gatsby を自宅でのランチに招いたのは Daisy である。そのランチの席で気まぐれから、ニューヨークに行こうと言い出したのも Daisy である。そして Daisy が Gatsby との関係を再開したのは、元はと言えば、Tom が女問題を次から次へと起こし、Daisy をして “I’m pretty cynical about everything” (17) と言わしめる状況に追いやったことが一つの要因ではないか。Tom が Myrtle という愛人を持ち、Daisy が Gatsby の再びの求愛を受け入れることがなければ、この日の取り返しのつかない悲劇的な事故は起きなかった。Tom と Daisy にも大きな責任があるというのが Nick の考えであろう。しかし、Daisy が Gatsby との関係を再開するきっかけは何であったか。Gatsby の要請を Jordan が引き受けたことである。Jordan にしてみれば、面白そうだという無責任な興味もあったかもしれないが、報酬として、Gatsby から Jordan に金が渡ったことは確実である。このようなことを意識して、Nick は、敢えて Jordan も含めて、「こいつらはもうたくさんだ」(111) と言ったのである。では、Jordan からの要請を引き受けたことに対し、Nick は、自分自身の責任をどう考えるのか。それがこのテキストの不思議な所だが、前記した罪のシンボルの記憶を別にして、この時点では言及がない。

Nick の罪悪感が比較的明白に読み取れるのは、この直後、第 8 章の最初の文である。「一晩中眠れなかった。…グロテスクな現実と恐ろしい悪夢のはざままで輾転反側していた (I couldn’t sleep all night; ...and I tossed half sick between grotesque reality and savage frightening dreams)」(115)。Nick がこれほど苦しく辛い夜を過ごしたのはテキスト全体でこの時一度だけしか書かれていないが、Nick はなぜ眠れなかったのか。何が恐ろしかったのか。この不眠の夜の時点で、Nick に分かって

いた「グロテスクな現実」とは、Myrtle が Gatsby の車にひき殺されたこと、その車を運転していた Daisy の身代わりに Gatsby がなると言っていること、Myrtle の夫 Wilson は誰が妻を轢き殺したかは分かっていると述べていたことである。この時の Nick の心を占めていた最大の不安は、「Gatsby の車がやがて警察に突き止められる (It's pretty certain they'll trace your car)」(115) ということであり、また、Wilson が Gatsby に復讐する可能性も考えたかもしれない。このままでは Gatsby は大変なことになると、Nick が直感したことは確実であり、暁闇に Daisy の家から戻った Gatsby の所にすぐさま出かけ、逃げろと忠告する。しかし、Daisy の態度がはっきりするまで留まることを選ぶ Gatsby の気持ちに Nick は理解を示し、Daisy に対する思いを語り続ける Gatsby に寄り添い、出勤時間に遅れるのも承知で、電車を二度もやり過ごす。別れ際には、Gatsby に向かってただ一度だけの賛辞として、“You're worth the whole damn bunch put together” (120) と Nick は言うが、この直前の “They're a rotten crowd” という台詞には、Nick 自身は含まれていないように読める。

遅れて入社した Nick に正午直前、Jordan から、今日の午後会いたいという電話が入る。彼女とは二度と会えなくなるかもしれないという覚悟を以て、Nick は断る。“I couldn't have talked to her across a teatable that day if I never talked to her again in this world” (121)。Myrtle の轢死事故の翌日ということもあったかもしれない。しかし、Nick は Gatsby のことが心配で、胸騒ぎを覚えていた。Jordan と Gatsby。どちらが大切か。この時の Nick の選択において、嘗て一度、Jordan に袖にされることを恐れて、Jordan からの要請を断れず、Jordan との関係を深めることは出来たが、結果的に重大な事態を招いてしまったという意識が、Nick の心の奥に働いていなかった、と言えるだろうか¹³⁾。

13) Nick は Jordan と最後に会って、結局、訣別を選ぶ (138)。Jordan を三度、拒絶したことになる。

Nick は会社を早退して、Gatsby 邸に直行する。¹⁴⁾ 悲劇は既に終わっていた。Gatsby は Wilson に射殺され、Wilson は自殺していた。「殺戮の環は閉じられた (the holocaust was complete)」(126)¹⁵⁾。一連の悲劇を総括する表現としては見事だが、他人事として見ているようで、この文章には Nick の自省の気持ちは感じられない。勿論、悲劇の全てに対して Nick に責任があるのではない。悲劇の全てが完結するまでの過程で、Nick には全く関係のないこともあったし、彼にはどうしようもないこともあった。悲劇の序章は、Nick が Gatsby 邸の隣にやって来る 5 年前に既に始まっていた。悲劇の種は Gatsby が Daisy に初めて出会う時より、ずっと前に蒔かれていたと考えることすら出来る。Nick は最終的には、そういう解釈を示した、と言える。しかし、それは Gatsby の悲劇の本質を Nick が見極めようとした結果、そういう解釈に至ったのであって、Nick が責任逃れ、もしくは責任転嫁をするのが目的ではない、と私は考えている。

本論の冒頭に引用したように、Nick は悲劇の全体に対して、「悪いのは Gatsby を食い物にした奴らである」と他者批判をしている。*The Great Gatsby* は人の倫理責任を問う、ということが主要テーマの一つであると言ってもよい。しかし非常に意外だが、responsible という言葉はテキスト全体で一度しか出て来ない。Gatsby が殺された後、“as he lay in his house and didn't move or breathe or speak, hour upon hour, it grew upon me that I was responsible, because no one else was interested” (127) という箇所である。Nick はここで、「私に責任があった」と述べてはいるが、なぜ責任があるのかの意味については決定的にずれていると言う他ない。Gatsby が殺されるという事件に結果する一連の過程に自分も関わっていた、という意味での責任ではない。Gatsby が死んだ途端、ど

14) この日、遅刻して出勤した Nick は会社で居眠りしていた。Gatsby が心配で、午後は早退。会社を首になることは覚悟していた筈である。

15) ここだけ村上春樹訳を使った。

んな人間にも最後の時には当然与えられるべきいくばくかの関心すら、誰も Gatsby には示そうとしないから、Nick は憤りを覚えつつ、誰かを呼び寄せることに自分が責任を持つ、と言っているのである。だからこそ、Gatsby 死後の後始末を Nick が一人で引き受けることによって責任を取るということにつながるのだろうが、だからと言って、それは Nick が自分の本当の責任を認めることの代わりにはならない。

Nick は自分に責任があると言いながら、なぜ責任が生ずるのかの意味について甚だしく間違っているのではないか、と多くの読者が思うのではないだろうか。私達がそう思うとしたら、それは私達読者はテキストの外にいるからである。自分の行為があまりに重大な結果を招いた時、そしてその責任を意識した時、責任はないとは言わないまでも、その責任をストレートに言えないのがフィッツジェラルドの描く人間の真実なのである。もし言えるとするれば、招いた事態が深刻でないか、或いは、特別正直で、特別偉い人の場合である。Nick はそのような人ではない。彼はしばしば言い訳をする。Tom の不倫を不快に思いながら、Tom の愛人のマンションに行き、矛盾した言動をしたことについては酒酔いのせいにする。¹⁶⁾ 第7章における Nick の不合理な行動に関しては、あまりの暑さを口実にせんばかりである。しかし、彼は倫理基準として踏み外せない一線を持っており、その限界点に達した時には、既に我々が見てきたように、毅然と行動する時もある。Nick は時にさもしく、不決断であり、しかし時には立派である。どこにでもいるような人なのである。自分に都合の悪い真実には決して向き合おうとしない Tom や Jordan のような人間ではなく、自分を愛する人に自分の罪を着せて逃げた Daisy のような人間でもなく、愛する人のためには何でもする Gatsby のような極端な人間でもない。だからこそ、正直さと不正直さを併せ持つ人間の迷いや苦しみが、鏡として

16) 今は不倫関係にある Tom と Myrtle は再婚したら、ほとぼりが冷めるまで西部で暮らすつもりだと言う Catherine に対し、Nick が、それならヨーロッパに行った方がもっと都合がいいんじゃないかと答えた (29) のは相当悪質なジョークと言う他ない。

の Nick の言動の中に一番よく映るのである。

責任を感じながらもストレートにそれを語れない Nick の語りの中に興味深い事実がある。Myrtle が Gatsby の車に向かって飛び出したという、それほど重要と思われない事柄が三度も、それぞれ異なる人物によって証言されているのである。凡その時間的順序に従って言えば、まず、Gatsby が Nick に話す。“this woman rushed out at us... it seemed to me that she wanted to speak to us, thought we were somebody she knew” (112). 次に Wilson が Michaelis に話す。“It was the man in that car. She ran out to speak to him and he wouldn't stop” (127). 三度目が検視陪審における Michaelis の証言である。“A moment later she rushed out into the dusk, waving her hands and shouting” (107). Michaelis は Wilson と同様に Myrtle 轢死事故の現場にいた目撃者だが、Wilson のような故意轢殺説ではなく、単なる轢死事故と見ていた。その Michaelis の証言 (より正確に言えば、彼の証言を Nick が記述したもの) を含めても、三者の言うことは、Myrtle が Gatsby の車に向かって飛び出したという点で、完全に一致している。Nick はなぜ、そのたびに異なる証言者を使って三度も繰り返す必要があったのだろうか。理由がなかったとは思えない。Nick 自身は事故を目撃していない。しかし、単なる偶然による事故ではなく、Nick 自身も深く関与した一連の出来事の連鎖の結果として起きた事故という認識を Nick は持たねばならなかった。そのためにこそ、Gatsby の車に轢かれた人間がたまたま Myrtle だったのでなく、Myrtle は車を運転している人物を Tom と誤認して、必死の思いで Gatsby の車に向かって飛び出したという事実を Nick は目撃していないだけに、三人の目撃者の証言を繰り返すことによって、絶対の事実として確認する必要があったのである。

人の死を招くことに結果した一連の事故・事件に対し、Nick が自分に責任があると意識するとしたら、何よりも重く責任を感じなければならないことは、「最後は Gatsby だけが正しかった」(6) と認識している自分

が、Gatsby の無残な死に至る過程に深く関与していたことに対する責任であるべきだろう。Gatsby を殺害した Wilson の自殺に関して Nick が責任を感じたとは思えないし、責任を持つべき理由もない。しかし、Myrtle の轢死事故が起きなければ、Gatsby が殺害されることはなかった。Myrtle の轢死事故に Nick は自分の責任を感じなければならず、事故の結果生じた Gatsby の死に重大な責任を感じなければならない筈である。Nick はなぜ、Myrtle の轢死事故にも責任があるのか。その起点は、Jordan との関係を深めたいがため、Gatsby と Daisy を自分の家で引き合わせる約束をしたことである。その時に、「Daisy と Gatsby のことは突如として考えなくなった」(63) と Nick が言っているのは、全てが終わった後で振り返ると、Gatsby と Daisy の運命を決定的に変えてしまったのはこの時の自分の決断だったのだと Nick が意識しているからこそと読んでも不自然ではないと思う。5章、6章における潜在意識としての Nick の罪悪感については既に言及した。7章においては、蛇というシンボルに Nick の罪悪感が結びついていることにも言及した。Myrtle が自分を轢殺する車の運転をしている人物が愛人 Tom であると錯誤するきっかけをもたらしたのも Nick であることも既に書いた。ガス欠の恐れを Nick が思い出したことがきっかけになったことは、Gatsby と Daisy を引き合わせたことに比べれば、罪と言えるようなものではない。しかし、Nick に、あの時自分があんな余計なことを言わなければ、という思いが後になって全くないとしたら、こんな徹々たることを敢えて言う理由がないのではないかと私は思う。この時、Wilson のガソリンスタンドに停車しなければ、Myrtle の錯誤は起こりようもなかった。Myrtle の轢死事故に至る過程を振り返れば、重要な節目節目で Nick が積極的に事態を引き起こしている。そのことに Nick が気が付かないということは不自然で、責任を感じていないという読み方に無理があるというのが私の考えである。では、なぜ Nick はそう言わなかったのか。勿論、Nick の責任の有無を問うのがこの小説の目的ではないということもあろう。しかし、それだけ

ではない。Nick が自分に責任があるという自覚をしていなければ、語りの仕方は別になっていた筈であり、凡そ読者に Nick の責任の自覚を読み取ることは不可能だったはずである。この作品の最後のほうで、「Wilson に何を言ったのか」と Nick に詰問された Tom が、「自分は真実を言った」(139) と真顔で答えたように、人々が信じている「真実」は本当の真実とは全くかけ離れている。だからこそ Nick は、Gatsby が悲惨な最後を遂げた経緯の真実を語らなければならない。その時に不可避免的に生じる Nick 自身の重大な責任についての語りは、どのように果たし得るのか。もし、明示的に語り得るとすれば、Nick は自分の責任の重大さについて十分に自覚していないことをむしろ意味する。自分の責任について触れないことにすれば、真実を語ることにならない。重すぎて語れない事実を含めて真実を語る。Jordan の軽蔑の微笑みを記し、テキストの要所要所で Nick の幻視、幻聴、幻覚、悪夢に言及し、また、Gatsby と Daisy の再会場面を Tom と Myrtle の不倫場面を想起させる描き方を敢えてし、更にまた、Myrtle が Gatsby の車に向かって走って行った事実を敢えて三人の証言を使って書き込むことにより、ストレートには自分の重い責任を語れないけれども、彼の自責の念を読み取れる人には読み取ってほしいと読者に委ねたのが、真実を語る責務を負うと自覚する Nick の選んだ語りの方なのであろう。

Bibliography

Primary Sources: Works by F. Scott Fitzgerald

The Great Gatsby. New York: Scribners, 1925.

The Great Gatsby: A Facsimile of the Manuscript, ed. Matthew J. Bruccoli. Washington: Brucoli Clark/NCR, 1973.

The Great Gatsby: The Revised and Rewritten Galleys. ed. Matthew J. Bruccoli. New York & London: Garland, 1990.

The Great Gatsby. Ed. Matthew J. Bruccoli. New York: Cambridge University Press, 1991.

Trimalchio: A Facsimile Edition of the Original Galley Proofs for The Great

Gatsby, afterword by Brucoli. Columbia: University of South Carolina Press, 2000.

Trimalchio: An Early Version of The Great Gatsby. Ed. James L. W. West III. New York: Cambridge University Press, 2000.

Secondary Sources

Crosland, Andrew T. *A Concordance to F. Scott Fitzgerald's The Great Gatsby*, Detroit, Mich.: Brucoli Clark/Gale Research, 1975.

Kruse, Horst. "The Great Gatsby: A View from Kant's Window", *The F. Scott Fitzgerald Review*, Vol. 2, 2003, pp. 72-84.

Lampe, Philip E., ed. *Adultery in the United States*, Buffalo, New York: Prometheus Books, 1987.

Russell, Bertrand. *History of Western Philosophy*, London: George Allen & Unwin, 1971 (Sixth Impression).

村上春樹訳『グレート・ギャツビ』中央公論社、2006年

